Thomas Pynchon 作 "Low-lands" 論

田　中　育　造

はじめに

1937年生まれの Thomas Pynchon はこれまでに *V.* (1963年), *The Crying of Lot 49* (1966年), *Gravity's Rainbow* (1973年) と, 3篇の小説を出版している。第一作は492ページ, 第二作は183ページと中篇であるが第三作目は896ページという大冊である。作品の数としては少ない方であるがピンチョンは「John Barth, Vonnegut などと同じく現代の悪夢や虚無を主題としながら, Gothic 風な描写, pop art 的な手法など, 寡作ながらきわめて注目すべき作家である[1]」という評価を受けている。1984年には1959年から64年までに発表した短篇5作を集めて一本とし, *Slow Learner : Early Stories* と題して出版した。

小論ではこの中の一篇 "Low-lands" をとりあげてその作品世界をさぐってみたい。初出は *New World Writing* 誌16号 (1960年) である。テキストの引用は Boston : Little, Brown 社1984年刊の初版により括弧内にページ数を示した。

1.「下降」の構造

この小説の基本構造は「下降」である。その構造のまわりにいくつかのイメージが付加されて小説世界が組立てられる。先ずその下降の構造から見ていくことにする。

主人公が下降していくのには三つの段階がある。

第一層。

主人公 Dennis Flange の家。海に面した崖の上に建っている。午後5時半。フランジは, ごみ収集の仕事からまっすぐにやってきた Rocco

Squarcione と一緒に，朝の9時すぎから飲んでいる。それでフランジの細君 Cindy は機嫌が悪い。二階を足音荒く歩きまわり，物を投げつけているらしい。やがて玄関のベルが鳴り，朝鮮戦争のとき同じ艦に乗っていた Pig Bodine が加わることになる。そのとき，シンディーの怒りは爆発して，三人もろともに家を追い出されてしまう。三人はとりあえずごみ収集車に乗ってごみ処理場へと向う。寝泊りする場所があるというのである。これが第一段階。

第二層。

螺線状に道を下っていくとごみ捨て場に出る。ここは街から50フィート下にある。フランジの家の寝室の窓から100フィート下が海であったから (a hundred feet below his bedroom window, the sea…—59ページ)，50フィートと窓までの高さ分だけ海面に下った，又は近づいたことになる。ロッコはワインを置いて去り，かわってここの守衛で黒人の Bolingbroke が加わる。ごみの山からマットレスをひっぱり出して寝場所をつくり，再びワインを飲んでは海にまつわる体験談やほら話をしあって眠りにつく。

第三層。

午前2時か3時と思われる頃，フランジは物音にふと目が覚める。女の声が呼んでいる。女はジプシーらしい。長い黒髪の，ほっそりした，子供ほどの背たけしかない人である。Nerissa と名のる。さそわれるままにフランジはあとをついて行く。ごみの山の中を通っていくうちに倒れた冷蔵庫の前で立ちどまる。扉をあけてネリッサは入る。フランジもあとに続く。20フィートほど進むと，コンクリートの管に出た。それがあちこちにトンネルのようにつながっているらしい。やがて行きどまりになり，小さな扉をあけるとネリッサのすみかであった。ネリッサはここでねずみの Hyacinth と一緒に暮らしている。ネリッサはフランジのお嫁さんになりたい，占いにそう出ていたのだと言う。フランジは一寸ためらうが，しばらくここにいてみようという気になる。

以上のようにストーリーを追いながら主人公の下降の様子をみてきた

わけだが，文中で示される矩離や方向から判断すると，フランジの下降の到達点はどうやら海面か又はそれ以下のあたりであることがわかる。それでは一体海面への下降とは何なのであろうか。それは又この小説の題になっている low-lands の意味にもつらなることになるだろう。

2．海＝女＝母胎

結婚7年目，妻との仲がしっくりいっていないフランジにとって大きななぐさめとなっているのは精神分析医と海である。この医者は少々精神異常で，その狂気ゆえにフランジはやめずに通っているふしがある。ともかく，フランジは思春期のころ，海は女であるということを知って以来，その暗喩にすっかりとりつかれてしまっている。それで海軍に入り，結婚して海辺に所帯をもった。大海原を見ると必ずそこに足をふみ出したい気持に駆られるのである。精神分析医はそれについて，

> …all life had started from protozoa who lived in the sea, and since, as life forms had grown more complicated, sea water had begun to serve the function of blood until eventually corpuscles and a lot of other junk were added to produce the red stuff we know today; since this was true, the sea was quite literally in our blood, and more important, the sea——rather than, as is popularly held, the earth——is the true mother image for us all. (59ページ)

と敷衍してみせる。

このように，フランジが絶えず求めていたのは女としての海であり，それは母性としての女であった。フランジの妻のシンディーは結婚前，母と共に住んでいたのが Jackson Heights というところであるが，その高台からシンディーをつれ出して海辺の崖の上に新居をかまえた。海なる女性と海のまぢかに住もうというわけである。

その家は奇妙な作りの家で，ぬめぬめとのたくる蛸の足のような通路が地下にのびひろがっているというものである。やはり海のイメージにつながる。この家はフランジにとって，

> Flange at least had come to feel attached to the place by an umbilical cord woven of lichen and sedge, furze and gorse; he

called it his womb…(57ページ)

というふうに母胎なのである。海は女であり，女は母性であり，フランジは母胎の中で安全なのであった。

しかし，シンディーとの仲はうまくいかない。ときどきフランジは家に入れてもらえずに裏庭にある小屋で寝るはめとなる。この小屋はとも交番だったものを，シンディーが気に入って強引にもらいうけてきたもので，シンディーごのみにしたてられ，モンドリアンの絵が何枚かかけてある。フランジごのみの曲がりくねった内部からなる家に対して，それとは全く対照的に，直線で構成されているモンドリアンの絵[2]にかこまれたこの小屋はシンディーの世界である。さらに加えてふたりの間に子供がない。こうしてフランジはシンディーの世界（母胎）では落着きが悪くなっていた。

if he were subjected for the rest of his life to nothing but relentless rationality of that womb and that wife, he would never make it, (58ページ)

そして遂に家を追い出されてしまうことになる。

第二層は現実の海に関する描写はないが，前述のように海面に近づいたことはたしかである。ごみ捨て場に至る道は曲がりくねっていてフランジが気に入っていた家のイメージと関連する。日は暮れかかり，次第に暗くなる地底へのこの行程は，また別の母胎への旅を暗示しているようである。

ごみ収集車は，はじめショッピングセンターや小工場などが隣接する住宅団地を通り，やがて舗装していない道路に出て，処理場に達する。そこには使いすてられた家庭電気製品やあらゆる種類のタイヤが山と積んである。いわば，文明世界から出された排泄物の世界への移行であり，秩序から混沌へと言ってもよい。光の中の現実世界から闇の中の非現実世界への接近であるとも言える。

第三層に入って，冷蔵庫が別の世界の入口であったというは，兎の穴や鏡の面と同じ機能を果たしながらいかにも当世風であっておもしろい。それはとにかく，ここでは一層海面に近づき（水中又は海底といった雰囲気がある），闇は更に濃く，閉されたところという感じは一段と強い。現実と幻想の区別はつけがたい。フランジを導くネリッサは次のように

黒のイメージにまとめられる。

In the starlight she was exquisite: She wore a dark dress, her legs and arms were bare, slim, the neck arching and delicate, her figure so slender it was almost a shadow. Dark hair floated around her face and down her back like a black nebula; (73—74ページ，下線は引用者)

黒髪が顔のまわりに "floated" しているのに加えて，

Whitecaps danced across her eyes; sea creatures, he knew, would be cruising about in the submarine green of her heart. (77ページ)

という描写でこの小説はしめくくられている。こうなるとネリッサは海の妖精といっていい[3]。ここにしばらくの間フランジが落着くことにするのは，再び，そして今度はもっと理想的な母胎にたどりついたことを意味する。シンディーの母胎は地上の，直線の，秩序の，光の，日常の世界であった。それに対してネリッサの母胎は地中（海底）の，曲線の，混沌の，闇の，非日常の世界である。フランジは遂に

a minimum and dimensionless point, a unique crossing of parallel and meridian, an assurance of perfect, passionless uniformity (65—66ページ)

に到達したわけである。ネリッサの母胎にたどりついたフランジは，いわば，人間原初にたちかえったとみることができる。フランジの下降は生の根源への接近なのであった。山口昌男氏は『文化の詩学II』の中で石福恒雄氏の文

…全く未知であるがゆえに，下の世界は私たちの好奇心を掻き立てつつなお限りない恐れを抱かせる。それは私たちに全く未知なるがゆえに闇であり混沌なのである。そこでは形態というものがなく，それゆえ物の本質が分明に露わになってこない。だが同時にこのことはこの闇である下の世界から，あらゆるものが発生し，発達し，形成され，開花する可能性を秘めている。そして，この下の世界にこそ上の表にはない真実が，混沌と無定形のうちにではあるが隠されている。([『身体の現象学』(金剛出版)] 135頁)

を引用し，そのことについて，

闇のなかですべては無定形と混沌に還帰するという意味では，闇のな

かへすべてのものは消滅するが，同時に，そこを起点にしてすべてのものが芽をふき形成されるという意味で，闇は黄昏と暁の両方にまたがっているということになる[4]。

とパラフレーズしている。つまり，ここは再生の可能性を秘めた完全な母胎なのであった。

子供のいないシンディーに対し，ネリッサは，この女自身が子供の大きさであることに加えて，一緒に暮らしているねずみを抱きあげたときの様子が，

She looks like a child, Flange thought. And the rat like her own child（76ページ）

と，フランジが求める二つのもの，母胎と子供（胎児）の両方をかねそなえている。

a child makes it all right. Let the world shrink to be a boccie ball.（76ページ）

フランジは胎児になる。再生の可能性はさらにねずみの名前がギリシア神話の変身再生物語と同じ Hyacinth であるところからもうかがうことができる[5]。

3．体制からの離脱

フランジがつとめているのは Wasp & Winsome 法律事務所という。これはかなり寓意性の強い名前である。この White Anglo Saxon Protestant が Win するアメリカのエリートコースともいえる仕事をフランジはいとも簡単に休んで，朝から酒を飲む。flange は「輪縁」といって，「車輪がどちら側にも脱線しないように，二本のレールの内側にはまるように，車輪に「へり」をつける。これで脱線が防止される[6]」ためのものである。フランジは体制のレールに一応のってはいたものの，どうも心もとない。

次にフランジと道行きを共にする人物たちであるが，ごみを集収しているロッコは名前から判断してイタリア系，精神分析医の Geronimo Diaz はインディアンとスペイン風であるし，ごみ処理場の守衛は黒人であった。つまり，アメリカでは Wasp ではない人たち，マイノリティーに属

する人間たちである。もうひとりの飲み仲間ピッグはその名前からも，そしてフランジの家の戸口に立ったときの姿が "What looked like an ape in a naval uniform " (60ページ，下続引用者) で，シンディーからはロッコも含めて "Some of the animals you [Flange] bring home" (56ページ) といわれれように，人間並みに扱われない。

家を追い出されるときにシンディーから，フォルクスワーゲンとひげそり道具ときれいなシャツをもっていっていいと言われても，フランジは断って，"I'll ride with Rocco in the truck." "And grow a beard," (62ページ) と答える。ここからはヒッピーを予告する響きがきこえる。

こうしてフランジの車輪はアメリカの体制からマイノリティーのレールへと乗りかわる。そして文明生活を営む住宅地を抜けて地下のごみ捨場へと行くわけであるが，そこに堆積し，次第にうず高くなっていくごみは地上に生活する文明人が排泄したものである。フランジはここに穴居人となるわけで，これはアメリカ的進歩の価値観とは全く逆のコースであろう。

このようにみてくると，フランジの行為には——いや，無為と言った方が適切かもしれないが——アメリカ現代文明を批判的に見る作者の目がうかがえるのである。動物とののしられるこのはみだし人間たちが愛するのはヴィヴァルディの音楽であり，一方シンディーはそれには一向に興味を示さず，1000ドルのステレオ装置もシンディーにはパーティのときにおつまみの盆を置く台にすぎないという皮肉がつけ加えられる。

フランジの名前は Dennis である。これは Dionysos に由来するといわれている。アポロン的，つまり，由緒正しい，天界の，荘厳で格調あり，冷静で自己抑制的な性格に対するディオニュソス的，すなわち，鬼神的な，大地ならびに下界の，獣的，興奮・狂燥・陶酔・狂気の特性を表わすわけで[7]，フランジの，そしてフランジの仲間たちの性格が一層はっきりする。

体制離脱の過程はこの小説の三層構造の点からもみられる。第一層は法律事務所につとめるホワイトカラーの世界，第二層はマイノリティーのブルーカラーの世界，そして第三層はゆくえ定めぬジプシーの仲間という風に次第に体制から離れていく構図になっているわけである。

これと関連するものとして，フランジのすまいの作りとその由来もあ

げることができる。第一層でシンディーと住んでいた家は,

> It had been built vaguely to resemble an English cottage back in the '20 's by an Episcopal minister who ran bootleg stuff in from Canada on the side… [中略] …Inside were priest-holes and concealed passageways and oddly angled rooms ; and in the cellar, leading from the rumpus room, innumerable tunnels, which writhed away radically like the tentacles of a spastic octopus into dead ends, storm drains, abandoned sewers and occasionally a secret wine celler. (56ページ)

というわけだし,浮浪者のたむろする地下のごみ処理場は,

> the entire dump had been laced with a network of tunnels and rooms back in the '30's by a terrorist group called the Son of the Red Apocalypse, by way of making ready for the revolution. (75ページ)

とあって,どちらも反社会的行為をする人間たちの巣窟なのであった。しかも,ここでも下降にしたがって1920年代から30年代と時代もくだり,そこにたむろしていた連中の思想の度合いも過激になっている。どちらの場合もはりめぐらされたトンネルという迷路のような構造で一致している[8]。

おわりに

以上のように,主人公フランジの描く下降の軌跡を,(1)再生を胚胎した母胎回帰と,(2)体制からの離脱という二つの面から考察してきたわけであるが,フランジの行為は終始全く受動的であって,自らの意思で行動しているのではないのに気づく[9]。妻に家を追い出され,ごみ処理場につれていかれ,ジプシー女に呼びだされて一緒に住むようにせがまれてそのようにする。一向にさからわない。これはどうしたことであろうか。

国家や社会や経済の体制を維持し,発展させていくには常に何か新しいことを「する」ことが必要だろう。そこでの価値観は「する」ことはプラスであり「しない」ことはマイナスになるはずだ。勤勉は美徳であり,怠惰は悪である。先進資本主義国であるアメリカではこうした観念

は強固であるにちがいない。ところがこの小説の主人公は，たくましい行動力と意思で荒野をひらき困難を打開する，といったこれまでのアメリカ的ヒーローとは全く反対の極にあるし，さまざまな試練を経ることによって心身ともに傷つきながらも無知をのりこえて自己を発見・確立する "initiation myth" の人物とも全然別ものである。

この短篇が発表された1960年には John Updike は *Rabbit, Run* で主人公ハリー・アングストロームをあてどもなく車で走らせ，二人の女の間をただよわせた。1961年には Joseph Heller が *Catch-22* でやはりアンチ・ヒーローであるロッサリアンを使ってアメリカの軍隊組織を徹底的に笑いのめしてみせた。これらの人物たちは，アメリカが大きく変だろうとしていた1960年代に出現すべくして現われた道化師なのであった。

発展に発展を重ねるアメリカのいきつく先は，核兵器による地球消滅の恐威であった。産業の高度の発達は，地球上の生物絶滅の危機に至るものであった。そうした状況にあって，フランジの母胎を求める low-lands への遍歴は，こうした流れに棹さす予言者の行脚とも，又は事の真実をうつしだす鏡のようにもみえてくるのである[10]。

(1985年10月)

［注］

(1) 斎藤勇・西川正身・平井正穂・編『英米文学辞典』第三版，研究社出版1985年，1082ページ。なお研究書は単行本で10冊ほどが出ている。

(2) 「いっさいの具象性を放棄し，垂直線と水平線に構造の原理をおき，原色の正方形，長方形の配置によって至高の秩序と均衡を求めた。都市や建造物にも強い関心をもち，その思想は20世紀の造形理論に深い影響を与えた。」『新潮世界美術辞典』新潮社，1985年。

(3) Nerissa という名前は Shakespeare の *The Merchant of Venice* に出てくるポーシャの侍女と同じで，ごみ処理場の守衛の Bolingbroke とともに，シェイクスピア劇の人物との関連を考えたくなる。しかしボリングブルックはごみの山をとりしきるわけだから関連があるといえばあるといえるが，ネリッサの方はとりたてていうほどのこともない。それよりも，海の妖精としてならばギリシア神話の Nereis に結びつけたい。ネーレーイスは父 Nereus の「海底の宮殿で黄金の椅子に坐し，歌い踊り，」(これはジプシーを連想する)「つむぎ，一般の娘たちと同じ生活を送る

美女と想像されている」(高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店1960年, 185ページ) からである。

(4) 岩波書店1983年, 202ページ。

(5) J. E. Cirlot の *A Dictionary of Symbols* によれば,

The symbolic significance of the sea corresponds to that of the 'Lower Ocean'——the waters in flux, the transitional and mediating agent between the non-formal (air and gases) and the formal (earth and solids) and, by analogy, between life and death. The waters of the oceans are thus seen not only as the source of life but also as its goal. 'To return to the sea' is 'to return to the mother, that is, to die. とある。(London: Routledge & Kegan Paul, 1971, Second edition, Translated from the Spanish by Jack Sage, P. 281) 再生ための死は, フランジの場合, ネリッサに呼び出される前の眠りがそれに当たると考えてよいだろう。

(6) 原田勝正『汽車・電車の社会史』(講談社現代新書713) 講談社1983年, 41ページ。

(7) ニーチェ『悲劇の誕生』岩波文庫230-1ページ。

(8) この小説の構造をてぎわよく分析したものに Tony Tanner の *Thomas Pynchon* (Contemporary Writers) London: Methuen, 1982年刊がある。

(9) 作者自身もこの本のはしがきで次のようにのべている。

Old Dennis doesn't "grow" much in the course of it. He remains static, his fantasies become embarrassingly vivid, that's about all that happens. A brightening of focus maybe, but no problem resolution and so not movement or life. (9～10ページ)

(10) as long as you are passive you can remain aware of the truth's extent… (69ページ)。